

宇治の町に生れけるが、青年の頃、彼町に在て學問しけるに、青春の情の動き易く、其時近隣に住める叔女に戀しけるに、その女やがて懷妊の身となりぬ。青年の驚き大方ならず、終に彼女を棄て、身を隠くしけり。爾來二十餘年、夜となく晝となく、ひまさへあれば、彼女は其後いかになり行きけん、其時の小兒はいかに成りしかと、雨にも風にも、身の舊惡をかこち居たりしに、今年三月、京都市にて、演劇『己が罪』を見けるに、男と女とこそ變はれ、劇中の主人環女たまきは、疑ひも

なく我が身なり。劇を見るの間、唯我身の歴史を見るが如く、環の苦悶は、我身の苦悶の直寫にて、我を忘れて觀終りたるが、歸寓の後、つらく、往事を思ふに、我れ故にこそ、彼女を痛く泣かせたれ、今は何處に住む、とても、尋ね出して、彼女の前に懺悔せでや置くべきと。終に宇治に至り、我名を告げて、其娘の母親に遇ひ、涙と共に昔の事を懺悔して、娘の身上を尋ぬるに、兩人の間の兒は、生後間もなく死亡し、娘は縁あつて他家に嫁したるが、此處にて一人の女兒を生み、其身

はやがて死してけり。其女兒のみは、今もよく生長せりと
 聞て、不憫の身の上やと思へども、今は親しく相遇ふて、慰諭
 するに道なく、涙と共に其家を辭し去りぬ。我家に歸りて
 後、心頭を回顧するに、二十年來の雲始めて晴れ、枕に就くの
 後、いまだ嘗て知らざる程の心地よき眠りに陥りぬ。餘り
 に心のうれしさに、事の始終を記載し、演劇の座長に書を寄
 せ、少からぬ教訓を受けし事を謝せしとぞ。我れ聞くがま
 らに、これを記録の端にため置きぬ。維摩經に曰く、「直心

はこれ菩薩の淨土也」と。罪惡を罪惡なりと自覺して、之
 を懺悔したる心の樂しさは。蓋し其人に非ざれば知る能
 はず。(同三月二十四日)

二七 野狼、村犬と相語る

野狼あり、瘦骨稜々、饑寒自から支へず、行て村里の間に食
 を求む。途に一村犬に遇ふ、體軀肥滿、毛色油の如し。野狼
 問て曰く、犬君何に由て此榮華を獲たる。村犬曰く、吾れ別
 に能事なし、唯我が主人に仕ふるに由て、此幸福を獲るのみ

と。野狼曰く、吾れ平素溪山を奔走して、僅かに其日の食を求む、今や其煩累に堪へざる也。願くば君、吾れを其主人に介し、君の榮華を分たしめよ。村犬曰く、善し、是れ極めて容易の事に屬す。唯、余が後へに附隨し來れ、吾れ將さに吾が主に説かんとすと。狼大に喜び、行步得々、相話して、村里の途を進む。まさに主人の門口に達せんとする時、狼率然として、犬の頸部を注視して曰く、我が兄よ、君の頸上に傷あり、是れ果して何の傷ぞ。村犬曰く、頸環の傷くる所也。吾れ

主人に奉事するに、主人、黄金の環を以て頸部を纏ひ、之を繋ぐに鐵鎖を以てすと。狼愕然として曰く、吾れ唯君の榮華を羨んで、其束縛あるを知らざりき。吾れ若し精神の自由を失はば、金環美食も、之を用ふる所なし。滿腹して、奴隸たらんよりは、餓ゑて自由を獲んには、如かず、請ふ此れより別ん。君は君の所に就け、吾れは我が好む所に從んど。掉頭顧みず、去て溪山の裏に隠ると。エビクタス曰く、「滿腹して、懊惱ならんよりは、餓ゑて平和に死するに如かず」と。

(同三月二十七日)

修 養 詩 話

二八 爾の自由に任せよ

我校に、數學の教授に従事せる一先生あり、余の嘗て師事する所也。余が今日、數學に就て有する所の智識は、一に先生の賜物たらずんばあらず。先生家に在て商業に従事すと雖も、性頗ぶる學を好み、教育に任すること二十餘年なり。予一日先生と相會ふて、酣談時を移し、互に往事を談す。先生曰く、君記するや否や、既に是れ十年の往事に屬す。一日

學校に、樹心會大會あり、學生趣向を凝らし、種々の餘興を催す。中に奇趣を成せるものあり、一閻魔王、嚴然として怒立し、命令を發するの狀を作す。傍に書して曰く、「閻魔王よ、り命する條々の事」と。かくて各教授の長短性癖に對し、種々の諷刺を作すものあり。中に於て、余に對する命令に曰く、「堂島に出張を命す」と。蓋し吾れ家に在て、米穀の商法をなすが故也。因て以爲へらく、是れ吾をそしるものなりと、心中甚だ安からず。會終るの後、將に歸途に就かん

とす。率然して以爲へらく、今日閻王の命、或は是れ天意の存する所かど。由て家に還らず、直ちに市場に走て米穀を購入す。いまだ三日を経ざるに、米價昂然として騰貴す。此機に臨み、彼の米穀を賣り放ちしに、一朝にして數百圓の奇利を得たり。予學校に職を奉じ、終日孜々として勤むと雖も、一年の俸給、かの利得の半額にだも達せず、思へば不思議のことなりきと。語り終て哄然たり。エピクテタス曰く、「如何なる事に會するも、之を悲むと悲まざるとは、一に

是れ爾の自由なり」と。蓋し先生の行事の如きは、最も明かに、此訓言の眞理なることを示せるもの也。(同三月廿九日)

二九 柳暗花明

陸劍南の詩に曰く、山重水複疑無路、柳暗花明又一村と、蓋し是れ劍南集中の佳句にして、春日山行の景を叙するもの也。山水重疊、路將に窮まらんとす。纔かに溪流の一角を回れば、柳緑花紅、鷄犬の聲、此中より出で、明かに宿を投ずべき一村を認む。如來の指導を信じ、念佛の行路を進む者は、

其れ尙春山を行くが如き乎。煩悶苦痛身を纏ひ平和の一路漸やく窮まらんとす。忽然として念佛の聲起るあり自ら省みて曰く、我の煩悶多きは、如來の仕事を盗むが故なり、如來は凡ての責任を負ひ玉ふに、我れ尙何を苦慮すべきか、我れ如來を信する一念に、我を棄て、如來海中に投せし也。我はなきに非ずや、セルフは滅却せるに非ずや、我の泥を洗ふべき所は、如來已に代て荷負し玉へり。我は今如來と共に在り、其

指導に由て動きつゝあるに非ずやと。嗚呼、不思議なるかな、溪路已に窮まつて、碧潭の底に沈むべかりしに、忽然として柳緑花紅の村を見る。かくて我は、今現在に、如來の救濟を感せざるを得ざる也。(同三月三十一日)

三〇 憂悶の原因

世の中に、不分明の事ほど、心配の種となることはなし。また不分明の事を相手として、其結論を待つほど、苦痛なるはなし。我れ明日旅行せんとす、晴れなるべきか雨なるべ

(52)

きか。此不分明の事を相手とする時、枕頭終夜夢穩かならず。我れ死するの後、我が妻子は衣食を得べきか、或は終に餓死を免れざる可きか。此不分明の事を相手とする時、終生一心の安穩を得ず。天候の晴雨は我の定むる所に非ず、そは一に天道の權限なり。妻子の饑うべきか、饑う可らざるかは、一に如來の配慮に屬す、凡て是れ我の憂慮すべき者に非ずと。問題[◎]は解決[◎]せられぬ疑[◎]雲[◎]は晴[◎]れたり、心配[◎]は除[◎]かれたり。其心配の除かれたる時を以て、如來の子に命じ

(53)

玉ふ仕事を勤めよ。心は平和にして仕事は進捗す。我の求めざる中に、如來は早くも衣食を與へ玉ふ。かくて如來を信ずる者は、容易に人生の苦惱を脱することを得。予一日、早起顔を洗はんとす、階下の一室に宿泊せる一婦人あり、蒼黄として一書を持ち來て曰く、昨夜國許より書信あり、末段の數行、字體不分明にして氣使ひなりと。面色頗る憂慮の氣を帶ぶ。予顔を洗ひ終り、井邊に立ちて之を讀むに、曰く、「末筆ながら、毎々御世話を相掛け、厚く御禮申上候ふ」

と、彼女喜んで曰く、それにて安心せりと微笑を漏し、厚く禮をなして去る。不分明の事、人を苦しむるもの概ね此の如し。如來を離れて獨立する時、我等は凡ての事皆不分明なり。明日の死生、貧富、來年の利得損益、十年已後の妻子の衣食、凡て是れ不分明なり。我等如來に歸へる時、凡ての事皆分明なり。曰く、萬事は如來宜きに作さしめ玉ふ。我は唯絶對に、如來の大命に服従すべきのみと。(同三月三十一日)

三一 如來に憑るの勇氣

某高等女學校に卒業式あり、式終るの後、師弟一堂に相會し、舊を談じ往を話し、嬉々として相樂む。中に一女あり、泣然として涙下る。諸人怪んで故を問ふ。彼女曰く、我身はかねてより約束あり、今日卒業の榮を荷ふと雖も、數日の後、地方に赴き、小學の教育に従事せんとす。今日までは温かき諸教師の下に在て、知らざるを尋ね、通せざるを問ふ、我は是れ人に負はれたる身なりき。されど今日以後は、我れ自ら急流に棹し、人世の波濤を渡らんとす。學の通せざるあ

り事務の處し難きあらば、我れ將に之を奈何せんとす。思ふて此に至れば、自から涙の泣然たるを知らざる也と。蓋し此の如き苦痛は、獨り彼女の懐けるのみならず、齊しく衆人の持する所なり。すべて女は唯さへ力弱き者なるに、凡ての責任を一身に負ひ、其責任を果し得ざる時、我れ之を如何せんと思惟す。負擔する所頗ぶる重し、苦痛も亦深からざるを得ざる也。我れ今如來を離れて一身の前途を思ふ時、亦彼女と同一の悲歎に會せざるを得ざる也。されど如

來に歸へる時、我れは明かに此悲歎を脱するを得るなり。我れ今教育に従事す、一に是れ如來の大命なり。學淺く識暗く、道德に缺如する所多きにも拘らず、同僚は我を容れ、學生は我を敬ひ、世間亦我を寛恕す。他力のなさしめ玉ふ所に非ずして何ぞや。我れ如來の命する所を作す、我に責任あらば、如來は必ず我に代て負ひ玉ふべし。前途に於て、逆流に遇ふべきか、遇ふ可からざるかは、我れ全く之を知るを得ず。我れにして其任に堪へずんば、如來は必ず職を辭せ

よと勧め玉はん。我れ其時に謹んで辭すべき也。如來より退却令の下らざる限りは、我が力の及ぶ所を盡さんに、何の顧慮すべきかある。清澤先生嘗て一文を認め、「如來に憑るの勇氣」と云ふことを示し玉ふ。沈勇剛氣先生の如くにして、尙筆を把て紙に臨む時、躊躇逡巡して曰く、此の如き悪文之を江湖に問ふは恥辱の至りなりと。また翻然として以爲らく、我が爲す所一に是れ如來の命なり、如來のなさしめ玉ふ所をなす、何の顧慮か之れあらんと。再び筆を

三二 春 盡

把て一氣文を作す、先生之を名けて「如來に憑るの勇氣」といふ。夫れ勇氣は人の美德なり、されど源泉なきの勇氣は、雨後の行潦の如し、其涸るゝや立て待つべき也。(同四月四日)

残紅新緑の佳節、同好相謀つて詩會を催し、新街二條堀岡素行氏の宅に集まる。宅は明倫舎と稱し、舊幕時代は、道話を爲すの道場たりと云ふ。庭砌清麗、風致愛す可し。題は

春盡と定めぬ。坐客冥想して字を敲く、會ま飛報あり、曰く、露國バルチック艦隊、既に印度洋を過ぎ、今方に新嘉坡の海洋を通過すと。坐客腕を扼し、筆を投じ、劍を把らんとするの氣あり。既にして余一律を得たり。

春盡

忽逢春盡感相纏。兵馬匆匆既一年。醉裏推敲帶奇激。詩中盟誓喜佳緣。山溪花落魚初躍。村路桑柔蠶欲眠。豫思戰機移北海。冰塊崩去浪連天。

主人堀岡氏曰く、予唯一男あり、陸軍少尉を以て、旅順攻圍軍に従ひ、去年十一月二十四日、東鷄冠山に戦死す。吾れ老境に臨んで此一男を失ふ。元と是れ國家の爲めと雖も、涙無き能はざる也。是れ予が兒の戦死を聞て賦する所、諸君幸に一覽を賜へと。乃ち箋に書して一絶を示さる。詩曰、挺身勇戦死軍門。如見如聞髣髴存。黄土欲埋不埋得。誠忠報國七生魂。聞く者之がために涙を掩ふ。(同四月九日)

三三 人影花間路

風日清麗、晩春の景愛す可し。此日少閑を得、友人某を東山の山莊に訪ふ。昨雨全く晴れ、落花青苔の上に點す。山禽亦時を得、嚶々の聲四山に滿つ。因て五言一絶を賦し、山莊の主人に呈す。

山莊訪友

人影花間路。禽聲雨後山。爲憐春色好。靜晝一敲關。

(同四月十一日)

三四 回春の時

三笠艦に在りし、英國海軍大佐某、本國に報知して曰く、去年八月十日の戦海に、上村艦隊は之に合するの暇なく、東郷大將獨り奮戦せしが、實際は今二三分にして、露國艦隊は封鎖線を破り得可かりし也。東郷大將は、まさに令を下して、全艦隊を佐世保に集合せしめんとし、最後に水雷艇に向て、虚偽の攻撃を爲す可く命す。是に於て、水雷艇は浪を破て進みしに、此時露國艦隊は、心氣終に挫折し、全速力を以て、旅

順に歸港しつゝありし也。奈翁曰く、勝敗の決は最後の五分に在りと。此事、豈獨り戰術のみならんや。迫害、貧困、疾病、罵詈、人生の敵艦、我が四周に集る時、忍べ、忍べ、陰忍以て時を待たば、他日安んぞ回春の時なからんや。(同四月十九日)

三五 武藏野の月

「武藏野の葉ごとくに置く月も露なき草に影はやごさじ」如來の大悲、いかに深厚にましませばとて、之を信受するの心なからんには、終に願船に乗託するの縁なき也。(同

(五月二十一日)

三六 送春又送君

友人平川浩然氏、性頗ぶる學を好み、食色よりも甚だし。曩に眞宗大學の業を卒へ、去て北海道に遊び、また歸つて叡岳の春雲に坐し、高野の秋雨を聽き、再び京都に留まる。而して攻苦終に倦まず。今茲五月、將に薩州に遊び、布教に従事せんとす。諸友其志を壯とし、送別の宴を城南文中園に開く。酒間詩を賦し、別れを叙す。

送平川兄之薩州

甲斐虎山

達人不羈束。心境難端倪。北溟曾養翼。豪宕氣吐霓。
 天地如翼土。燕雀豈同栖。一躍向何處。南海雲影低。
 君持金剛杵。須彌可粉壘。君能吹法螺。一聲警群迷。
 跡如萍浮水。心似花粘泥。人生離亦合。愁詩不須題。
 携手橋頭立。遠風送晚凄。杜宇果何意。啼過暮雲西。

同

安藤荻洲

憂道不憂貧。謀道不謀食。聖賢濟時心。千載存規則。

法燈影漸暗。大道跡欲熄。誰以聖賢心。一起闢壅塞。
 聞君賦遠遊。壯心磨鐵石。窮通何須問。唯期濡荆棘。
 圖南恰時哉。溟海可振翼。鹿城雖邊陲。江山作詩國。
 煙波留餘烈。城郭剩戰跡。照師與南翁。堪吊英雄魂。
 今日詩酒筵。悲歡滿胸臆。送春又送君。一鵬暮山碧。

(同五月二十二日)

三七 慈悲の重圍

五月二十七日對馬の大海戦起る。初め波艦隊司令長官

ロゼスタウンスキー氏は、臺灣の近海に於て、足手纏ひとなる石炭船を分離して、清國上海に入港せしめ、わざと四五日の間、臺灣近海に漂泊して、既に太平洋に向ひたるの状をなし、東郷大將を欺かんとせしも、大將は此手に乗らず、愈よ守備を嚴にして、對馬海峽に待ち受けたりしが、二十七日の黎明に及び、敵艦果して對馬水道に現はる。是より激戰時を移し、二十八日の午前十時に至て、子ボカトフ將軍は、竹島附近に於て、東郷艦隊の包圍を受け、終に降服の已むなきに至

れり。力弱き者は、いかに遁れんとするとも、力強き者の包圍を脱するを得ず。我等は力弱しいかにあせるとも、如來の慈網を脱する能はず。友人曉烏敏君曰く、「歎異鈔」第九節を拜讀すれば、我の遁ぐる前方に、如來は兩手をひろげて待受け玉ふが如き感あり。我は百方口實を設けて、如來の慈網を遁れんとす。曰く、歡喜踊躍の心起らず。曰く、煩惱興盛なるが故に往生はかなふまじ。曰く、往生の近づくを歡ぶの心起らずと。口實多端なりと雖も、到底慈網を脱

する能はずと。されど予は尙一語を附せんとす。曰く、予
 ホカフト將軍は、武士の面目を重んずるがために、帶劍の儘
 にて降伏を許さる。我等は凡夫の本性を保持するがため
 に、煩惱具足の帶劍の儘にて、安養淨土の往生を許さる。思へ
 ば不思議の佛智なり。(同五月二十九日)

三八 故山の夏月

「國を去ること逾々遠くして、人を思ふこと逾々切なり」
 とは、吾れ嘗て莊周に聞く所也。予や、久しく天涯に在て、志

業成るなく、歲月頻りに蹉跎たり。客窓枕頭の夢、遠く故山
 に飛びし、こと幾回なりしぞ。國を去るの遠きに随ひ、故山
 を戀うるの情は、逾々切なり。時は來りぬ、如來の大命は降
 りぬ。明治三十八年七月二十一日、終に行李を整へ、欣然と
 して歸國の途に上りぬ。此日大阪灣を出帆、柁樓に上て四
 面の光景を望むに、淡路島は前面に笑て我を迎へ、須磨の夕
 照は依々として我を送る者の如し。煙波渺茫、孤帆恙なく
 終に別府灣に入れり。故山に歸るや否や、兄弟親戚皆悉く

一堂に集りぬ。或は梨を割くあり、或は酒を煖むるあり。笑聲歡語頻りに簾櫳の外に漏れぬ。一周日の間は、親族舊知の家に往復して、話せども話せども、談話は更に盡きざりき。七月三十一日、近村の首藤醒軒と呼べる老人を訪ひぬ。翁は淡窓先生の門人にして、地方に得難き碩儒なり。翁は初め佛法を信せざりしが、大悲の御方便や強かりけん、晩年終に篤信の行者となりぬ。予の訪問を歡びて、信仰談より學問に入り、學問より世事に入り、更に轉じて清澤先生の人

格に移り、問答往復盡くる所なかりき。夏月清光を放つて庭樹の間に及ぶ頃、庭上に床机を出し、相對して晚餐の席につきぬ。翁、杜甫の詩を朗吟して曰く、晚餐市遠無兼味、村酒家貧唯舊醕と。蓋し翁は、杜詩を以て、膳羞意の如くならざるを謝する也。嗚呼、厚意何ぞ堪へん。翁また曰く、杜詩に、同學少年多不賤、五陵衣馬自輕肥と云へる句あり。是を以て察するに、杜甫の朋友には、富貴榮達を得、輕裘肥馬に身を託せしもの少なからざりしと覺ゆ。されど其輕裘肥馬の

中。に。は。今。日。聲。名。の。存。す。る。者。一。人。も。な。く。却。て。雨。露。を。凌。ぐ。に。家。な。く。船。の。中。に。妻。子。を。養。ひ。老。傘。一。張。を。以。て。纒。か。に。雨。を。凌。ぎ。し。杜。甫。の。み。其。聲。名。を。千。歳。に。殘。せ。り。富。貴。の。恃。む。可。ら。ず。し。て。人。格。の。尊。嚴。な。る。や。此。の。如。き。も。の。あ。り。と。翁。ま。た。曰。く。我。が。兒。に。妻。を。迎。へ。し。に。此。女。頗。る。孝。順。に。し。て。予。等。兩。親。に。事。ふ。る。こ。と。親。切。を。極。む。若。し。親。に。し。て。我。が。兒。を。ほ。む。る。者。あ。ら。ば。四。隣。必。ら。ず。之。を。笑。ひ。其。言。を。是。非。す。る。も。の。也。されど我。が。家。の。嫁。の。み。は。予。之。を。ほ。む。る。と。雖。も。四。隣。是。非。す。る。も。の。

一。人。も。な。し。君。嘗。て。聞。か。ず。や。『論語』に曰く子曰孝哉閔子。騫。人。不。問。其。父。母。昆。弟。之。言。と。父。母。昆。弟。之。を。ほ。め。て。四。隣。の。是。非。す。る。も。の。な。き。は。眞。に。是。れ。其。人。の。孝。な。る。所。以。な。り。と。翁。ま。た。曰。く。四。書。の。中。に。邦。畿。千。里。と。云。へ。る。言。あ。り。或。人。戲。れ。て。千。里。の。長。さ。あ。る。筈。は。如。何。な。る。大。人。の。持。つ。所。ぞ。と。云。ひ。し。に。旁。人。之。に。答。へ。て。そ。は。孔。門。の。閔。子。騫。な。る。べ。し。鬢。の。長。さ。四。間。あ。る。已。上。は。其。身。體。の。長。大。な。る。こ。と。亦。以。て。推。測。す。る。に。難。か。ら。ず。と。云。へ。り。し。と。ぞ。翁。は。語。り。終。つ。て。大。い。に。笑。ひ。

ぬ。予も亦大いに笑ひぬ。(同七月三十一日)

三九 争論の道絶ゆ

翁また曰く、予の村に一青年あり、頗る俳句を好めり。或時、新聞社の懸賞に應じ、終に一等賞を得たり。嘗て此青年の叔父に俳句の宗匠ありて、なか／＼の名人なりしが、今は早や故人となり終れり。然るに彼の青年の句は、實は叔父の秀吟を剽竊せしものなりき。偶々之を知る者あつて、新聞社に通じければ、社人も之を忌はしき事に思ひ、彼の青年

を諷刺して、其非を自白せしめんとしけるに、青年忽ち一句を寄せて、「似たとて盗みはせぬぞ路の臺」と申し送りぬ。社人いよ／＼憤慨して、「言ひわけをするほど似たり路の臺」と一矢を放ちけり。青年は更に折りかへして、「盗んでも叔父の畑なり路の臺」と申し送りければ、新聞社も、争論の道絶わて、また問ふ所なかりしとぞ。蓋し隠蔽は争論の本にして、また苦惱の根源なり。隠蔽する所少きものは従つて苦惱も少かるべきなり。(同七月三十一日)

四〇 鶴城の古戰場

鶴城は、豊後の國主大友氏の屬城にして、地理頗る峻峻を極む。山脈峨峨として、東西に連なり、前面に河流を控へ、難攻不落の堅城たり。天正十四年、薩摩の國主島津義久、大兵を舉げて豊後に入り、大友氏の領地を併呑せんとす。大友宗麟、其敵す可らざるを覺り、豊臣秀吉に救を請ふ。秀吉報じて曰く、我れ將に大兵を舉て、島津氏の罪を問はんとす、汝固く守りて降る勿れと。因て長曾我部元親、仙石秀久をし

て先發せしめ、大友氏を援けしむ。大友氏の精銳、鶴城に據て薩軍を防ぐ、薩軍容易に抜く能はず。會々城中軍士を慰勞しけるに、鱗三疋不足して、一兵士に給與せざりければ、かの兵士竊かに薩軍に赴き、城後の間道を告ぐ。之に由て城終に陥り、また薩軍を防止する能はず。「鶴城は鱗三疋に由て落城す」とは、今も尙ほ土人の言ひ傳ふる所なり。人心の變化は、此の如き機微の中に存するもの也。世に處する者注意せざる可らず。長曾我部元親は、仙石秀久と共に、鶴

城を救はんとて、其城下に進みしが、終に薩軍の破る所となり、元親の長子信親戦死し、元親は僅かに身を以て四國に遁れ歸へれり。信親の弟は盛親と云ひ、元和の役、大阪城中に在て、驍勇の名を上げし長曾我部盛親即ち是れ也。兄弟共に戰場に骨をさらすと雖も、英魂長へに人の弔する所となる。苟も生を偷み義に背き、枯骨永く地下に朽つる者に比すれば、其優劣果して如何ぞや。八月二十九日、阿兄松雨、從兄松丘二子と相携へ、濛々たる秋霖を侵して出發、先づ信親

の墓に謁し、路傍の草花を折て之に捧ぐ。躋攀して山上に至れば、松樹鬱蒼、煙霏四面に満ち、頗る懷古の意をして深からしむ。予少年の日より、この鶴城を望む毎に、一たび往て弔せんとする意ありき、今日漸やく宿志を果すを得たり。
(同八月二十九日)

四一 別離の訓誡

九月一日、予は再び故郷を去て、將さに京都に向はんとす。村人親戚、相送て村後の山上に至る。人影の見ゆる限り、互

(82)

に相呼んで別離を告ぐ。送者匿愁俱掩淚。征人鼓氣去無言。と云へる古人の詩を聞きしが、今頗ぶる其妙旨を會得するを得たり。進んで大分町に至れば、首藤醒軒翁七十餘歳の老軀を以て、予を此に待ち受け玉ひぬ。乃ち旗亭に入て酒を酌み、互に別離を叙す。他日の再會を約すと雖も、是れ生別離ならんとは、翁も我も竊かに心に期する所なり。翁別れに臨んで、予を誡めて曰く、君若し人の説を聽くことあらば、唯小兒の如き心に成て之を聽け、然からざれば、益を得

(83)

ること少き也。また曰く、君年齒尙壯なり、婦人に注意せよ、孔聖言はずや、血氣いまだ定らず、之を戒むる色に在りと。嗚呼、翁の忠言何ぞ其れ切なるや。予れ不似と雖も、請ふ此語を事とせん。九月三日、綠川丸に投じて別府港を發す。四日壇浦を過ぐ。船破驚濤不少閉。沙禽鳴渡海門間。戰雲長護九郎壘。銳氣猶存五劍山。春雨過灣白帆淡。夕陽射島翠苔斑。誰言宮闕在波底。千古興亡客淚潛。とは、是れ予が明治二十五年の春、上京の途次、壇浦を過て賦する所

なり。今また此海上を過ぎて、懐古の意禁する能はず。九月五日、無事京都に入る。此日、日露平和條約の調印成ると聞く。(同九月五日)

四二 恃むべきを恃む

我。等。は。如。來。以。外。に。絶。對。に。依。憑。す。べ。き。も。の。な。し。妻。子。父。母。國。家。財。産。終。に。恃。む。に。足。ら。ざ。る。な。り。恃。む。可。ら。ざ。る。も。の。を。恃。ま。ば。爾。の。苦。惱。に。陥。る。を。奈。何。せん。エ。ピ。ク。テ。タ。ス。曰。く、
「爾土瓶を愛する時、我れ無常の土瓶を愛すと覺悟せよ。」

かくて爾は、土瓶の破壊する時、苦惱に陥るを免がるべし。爾、妻子を愛するも、また土瓶を愛すが如くせよ。我れ無常のものを愛すとの一事を忘る可らず。かくて爾は、妻子の死に際して、悲歎號泣するを免がるべし」と。されど執着強き我等は、此教訓を聞きながら、知らずくの間、に、妻子を以て常住のものと思ひ、其病に遇ふを見ては、死の運命の來らんかと、憂懼措く能はざるものあり、皆達觀せざるの罪なり。予の隣村に一富人あり、二百十日の前日に至り、頻りに

(86)

風雨の至らんことを祈念す。蓋し其家に數十俵の米穀を藏するを以て、風雨に由て、價額の昂騰せんことを期待すればなり。然るに其夜風雨頻りに至り、翌日洪水大いに起る。其家適々河邊に在りしを以て、妻子と財寶と家屋と家畜と、凡て洪水の洗ふ所となり、全家一人も存するものなし。是れ明治二十九年九月の洪水の時なりしとぞ。其風雨に由て白己の利益を得んとし、却て風雨に由て一家の破滅を招きしが如きは、偶然の出來事なりと雖も、道を修むる者に取

ては、輕視す可らざる訓誡也。蓋し恃む可らざるものを恃むは、自から我身を擧て、苦惱の深淵に落すもの也。(同九月八日)

四三 樂んで憂を忘る

子貢の曰く、貧にして諂ふことなく、富んで驕ることなきは如何と。子曰く可也。いまだ貧にして樂み、富んで禮を好む者には如かざる也と。貧而樂の三字、我等終生之を守るも、尙盡きざるものあり。蓋し此意を解せずんば、一家の平和は得て望む可らず。貧富は天の賦與する所にして、人力

(87)

の奈何ともする能はざる所なり。夫れ天賦の中に在て、妻は夫を責め、夫は妻を責め、貧を脱して富貴に入らんとす。一家缺裂せずして何をか爲さん。若し夫れ貧に安んじ、父子相責めず、夫妻相求めず、歡笑の中に職務を勤めんか、幸福來らざるを得ず。笑ふ人の門頭に福の來ると云ふは、蓋しこれがため也。然れども、樂むには本源あり、中に養ふ所なくして、安んぞ樂むを得んや、是れ修養の最も必要なる所以也。
(同九月九日)

四四 竹田の蘊蓄

古へ稱す、孔明已前に孔明なく、孔明已後に孔明なしと。我が朝の畫界に在ては、則ち曰く、竹田以前に竹田なく、竹田以後に竹田なしと。蓋し田翁の畫は、直ちに造化の工を奪ひ、鬼神をして泣かしむるものあり。然れども、其然る所以を察すれば、實に胸中の蘊蓄に基す。翁は唯樂んで寫す、其樂む所、乃ち雲煙の鬱勃する所なり。杜甫嘗て曹將軍を歌ふて曰く、丹青不識老將至。富貴於我如浮雲と。移して以

(90)

て田翁の人と爲りを評す可し。予此頃、田翁の書簡を見るを得たり、其文に曰く。

甚暑の時分、公室萬福、隨而同方様にも、御揃御清寧、奉大賀候。小生無事、御安意可被下候。其後は、彼れ是れ仕候て、大に御無沙汰申上候。小生も先達而より、阿彌陀寺より、洛東雙林寺中に遷り申候。則ち池無名翁の舊宅、大雅堂に居申候。先づは身を勝地に遷し申候。乍去、不才の處を慙申候事に御座候。偕小生も、又々來年の遊學の事、何卒乍御世話

(91)

毎度恐入奉存候へども、寛叔先生に御相談宜敷御願申上候。小生も當年は、月渡り暮渡り、共に大阪書林加賀屋に遣はし申候故、甚だ難澁仕候。何分宿より上せ候計りにては、取つゝき出來兼申候。夫故事により申候は、當暮は、下り申候事も可有之候へども、先づ御願置可被下候。奉願候。ならば一日でも逗留仕候而、填詞圖譜なども残り四冊も刊行仕度、相企居り申候。但し是も、二十兩計りは掛り申候事故、容易には貧生は出來兼申候。若しは萬一、立行兼ね下り申候

様にも相成可申候。夫に付きて、何卒宿元の處、何分にも宜敷筋に、いかやうとも御片付け、壹通り御願申上候。或は微祿を半分して、醫家を立て申候ふとも、或は養子仕候て、小生は閑居仕り、館中の諸生へ、詩作の少々宛相談仕り候て、小生の微力を盡し申候ふとも、いかやうとも御相談可被下候。偏に奉希候。小生の不才にては、一家だに治まり申候事出來不申候。此處偏へ御憐察可被下候。奉願候。況んや多病にて、小生の不調

法なる世事に責められ申候ては、益々病を長し申候事に御座候ならば、此上へ諸人の邪魔に成り申候故に、靜かに引込愚を守り申候より外に、工夫も無之候。何分にも、小生が不才の處、御憐察可被下候。右御願申上度、如是御座候。隨分甚暑、御保護專一に奉存候。頓首。六月九日、田能村行、頓首。右の書簡は、先生が京都に在て、讀書繪畫に專注せる際、其郷人に寄せて、自己の意中を告げしものにして、先生の小傳といふを得べし。『填詞圖譜』は、文人墨客の最も尊重する

所、是れ先生の貧書生の生活中に成りしもの也。其俸祿の全部を書林に投じ、讀書に因て胸中の雲煙を養ひし跡、歴々として見るべき也。蓋し先生の家は、代々醫を業とせしとの事なれば、先生は身を書界に投じ、別に人を養ふて醫家を立てしめんとせしなるべし。末段に至て、一に自己の不才を謝する所、眞に先生の面目を見るが如し。世を驚かし、萬世に鳴るの妙書は、實に此謙遜辭讓の中に胚胎せし也。他日先生が、雲煙に對し、樂んで憂を知らず、銳意筆を振ふて造

化の工を奪ひしもの、其本源は、實に此一書簡の生活中より來りし也。(同九月十日)

四五 胡枝花を觀る

九月二十四日、東山に遊び秋色を尋ぬ。胡枝花露に飽て、蟲聲其間に在り。閒澹の秋光、唯我輩の擅まにする處、到處石に踞して詩を探る、終に一律を得たり。

觀胡枝花

幽姿處々畫秋光。妍意滿庭詩趣長。暮月相嬌憐婉約。

淡煙微罩愛蒼涼。枝懸蝶影時搖夢。花觸人衣欲灑香。
喜聽此間蟲語湧。更移燈火倚吟床。(同九月二十四日)

四六 救ひの姿

同じく太陽の光を受くと雖も、女郎花は黄にして、胡枝花は紅なり。黄と紅と、其色彩を異にすれども、二者齊しく野花の本性を維持す、此装ひ豈些の偽りあるべけんや。信仰の本源は、齊しく如來の慈悲に基くと雖も、現在に救ひの力を感ずる所には、自から相異なるものあり。寂寥の人は慰

安を得、無力の人は力を得、罪惡に泣く者は解放を得、貧困に苦しむ者は衣食に安慰を得、其力を感ずること異なるも、同じく是れ絶対無限の顯現する所なり。若し力を感ずる事我と異なるが故に、偽りの信仰なりと言ふ者あらば、吾れは斷じて與みせざる也。(同十月十五日)

四七 惟だ絶対歸れ

相對のものは、絶対歸るに由て初めて平和を得。苦惱に沈む者は、相對の問題に苦しむもの也。若し絶対歸ら

ば。懼るべし。憂ふべきものなし。故に苦惱に沈む時は、直ちに如來に歸るを要す。如何にして歸るべきか、如來を思念せよ。心懷動搖して思念する能はず、然らば佛名を稱へよ。名號は如來の御名なり、御名の下に大悲の御手あり。大悲の御手に觸るゝ時、安んぞ憂悶の解けざるあらんや。我れ憤怒の念起る、然らば如來を念せよ。我れ沈鬱に沈む、然らば名號を稱へよ。絶対に入る時、苦惱は凡て融和せらるべき也。(同十月二十日)

四八 惡人救濟の可能

聖賢佛陀の教へあるは、是れ惡人救濟成立の明證なり。救ふ能はざるものならば、聖賢佛陀の千言萬語も、終に無用の長物たらんのみ。我れ不可思議の因縁に由て、此に如來の慈悲を聞く。嗚呼、我れは救ひの道に遭遇せりと喜ぶべき也。

四九 泥水沐浴

道德上に於て、一度も泥水に陥らずして、無事に進行し得

る者なきには非ず。されど這は道德的天才にして、常人の企及し得る所に非ず。道德的天才、固より善良なり。されど一度び泥水を踏んで、然る後翻然改悛して、善人となるものあらば、斯人や真に尊重すべき人物也。其罪惡に對するの抵抗力や必らず偉大なるべし。されど道德的天才の人は、萬一誘惑に會する時、其抵抗力の奈何はどなるべきかは疑問也。カール・ライル曰く、泥水マッド沐浴バリスを経よと。されば道に志す者、一度び誤て泥水を踏みしとて、何ぞ自ら輕んじ、自暴

自棄するを須ゐん。翻然心を改めて道に進まば、大靈は必らず我を愛撫し玉はん。(同十一月八日)

五〇 教育家宗教家の報酬

善良なる事業は、自ら求めずとも、必らず繼承者の出来るもの也。されば我が爲す所の事業の、人を益するか益せざるかを問ふ可し、繼承者の有無を顧慮す可らず。自から善なりと信せば、唯全力を盡して邁進すべし。ワット氏は瀛力の用ふべき事を知りたるのみにて、いまだ複雑なる機關

を作らざりしと雖も、其事業の善良なりし爲め、終に今日の發達を見るに至れりとは、是れ米國の名士ブライアン氏の説く所也。君また曰く、政治家は國家を善良にし、人民をして安寧ならしめんと欲す。故に其報酬は、目的の存する所に従ひ、國家安寧と成て顯はる。即ち國家安寧は政治家の報酬なり。教育者は人物を養成せんと欲し、宗教家は信仰者を得んと欲す。故に人才の輩出し、信仰者の増加するは、即ち是れ教育者、宗教家の報酬なり。金錢の報酬の如きは、

抑々末の問題なりと。嗚呼、何ぞ其言の尊嚴なるや。千金の子は、人を富まし、人を貧にするの權を有す。されど内に養ふ所あらずんば、人を貧富にするの權を以てして、一言の道に近きものを吐かんと欲すれども得可からず。天子の宰相は、人を活かすべく人を殺すべし。されど心に修むる所あらずんば、人を活殺するの權を以てして、一言の道に近きものを吐かんと欲すれども能はざる也。ブライアン氏の如きは、眞に天下の名士たるに愧ぢざる也。其吐く所、一

言一句盡く道に合す、古人の所謂ゆる咳唾珠を成す者に非ずや。往年米國に於て、ヒリピン戦争の起るや、速かに彼の國人に自由を許し、ヒリピン征討の旗を還さしめんとしたるは、實に此ブライアン氏なりき。吾れ此時より君の風貌を想像せしが、十年の後に於て、今日初めて京都市議事堂にて、君の眼前に立ち、其高論卓説を聞くを得たり。殆んど宿債を果すの感あり。(同十一月九日)

山茶花樓懷舊(終)

大正二年七月十日印刷
大正二年七月十五日發行

修養詩話與附

正金八拾錢
稅金八錢

〔不許複製〕

著作者 安藤州一
 京都市下珠數屋町東洞院西入
 橋町九番戶
 發行所 西村九郎右衛門
 京都市北小宮通新町西入
 印刷者 須崎勳兵衛
 電話下一一四一番
 京都市下珠數屋町東洞院西入
 發行所 西村護法館
 振替東京四五九七

全國特約販賣店

京都市
 法藏館 興數書院 下村法林館 顯道書院 法文館 爲法館 山内正次郎 三浦支店 藤井佐兵衛 貝葉書院 佐々木惣四郎 井上文鴻堂 東枝吉兵衛 永田榮次郎 山中勘次郎 河合卯之助

94
798

終

